



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

26

柳田国男
斎藤茂吉
折口信夫

中央公論社

柳田国男
斎藤茂吉
折口信夫

昭和44年7月5日初版発行
昭和49年2月1日7版発行

発行者 高梨 茂

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 株式会社トープロ
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 株式会社トープロ
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 文京紙器株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

柳田国男

雪国の春

浜の月夜

清光館哀史

不幸なる芸術

笑の本願

うつぼ舟の話

山の人生

7

19

21

27

35

43

61

桃太郎の誕生

159

斎藤茂吉

短歌道一家言

185

作歌四十年より

208

赤光抄 あらたま抄

森鷗外先生

246

念珠集

271

滞欧随筆より

293

接吻 おどり ドナウ源流行 復活祭
ユンクフラウ行 ナポリ遊行記

茂吉小話より

芭蕉の句 ニイチエの病氣 お通夜

不犯

折口信夫

海やまのあひだ

死者の書

零時日記

山の音を聴きながら

姥の話

雪の記憶

341

353

412

483

503

507

510

恋の消息

日本の道路

留守ごと

注解

解説

年譜

口絵

挿画

大岡昇平

上村松篁

畦地梅太郎

真垣武勝

上村松篁

547 534 523 518 516 513

「死者の書」

「雪国の春」「清光館哀史」「ち
つぽ舟の話」「山の人生」

「滞欧隨筆
より」

「死者の書」

柳田国男

雪国の春

一

支那でも文芸の中心は久しい間、楊青々たる長江の兩岸にあつたと思う。そうでなくとも我々の祖先が、つとに理解し歎賞したのは、いわゆる江南の風流であつた。おそらくは天然の著しい類似の、二種民族の感覚を相親しましめたものがあつたからであらう。始めて文字というものの存在を知つた人々が、新たな符号を透して異國の民の心の、隅々までを窺うは容易の業でない。ことに島に住む者の想像には限りがあつた。本来の生活ぶりにも少なからぬ差別があつた。それにもかかわらずかななる往來の末に、たちまちにして彼らが美しといい、あわれと思うもののすべてを會得したのみか、さらに同じ技巧をかりて自身の内にあるものを、彩どり形づくり説き現わすことを得たのは、当代においてもなお異数と称すべき慧敏である。かねて風土の住民の上に働いてい

た作用の、たまたま双方に共通なるものが多かつた結果、言わば未見の友のごとくに、安々と來り近づくことができたと見るのほか、通例の文化摸倣の法則ばかりでは、実はその理由を説明することがむづかしいのであつた。

ゆえに日本人の遠い昔の故郷を、かのあたりに見出そうとする學者さえあつたので、呉の泰伯の子孫という類の新説は、論拠がなくとも起りやすい空想であつた。ひとり魚鳥のはるばると訪い寄るもの多く、さては樹の実や草の花に、移さずしてすでに相同じいものが幾らもあつたのみならず、それを養い育てた天然の乳母として、温かく濕つた空氣、これを通してきらきらと濡れたような日の光、豊かなる水とその水に汰り平らげられた土の質までが、誠によく似た肌ざわりを、幾百年ともなく兩國の民族に与えていたのである。人間の心情がその不斷の影響に服したのは意外でない。

その上に双方ともに、春が飽きるほど永かつた。世界のいづれの方面を捜して見ても、亜細亜東海の周辺のように、冬と夏とを前うしろに押し拵けて、緩々と温和の季候を楽しみ得る陸地は、多くあるまい。これはもとより北東の日本半分においては、味わいあたわざる経験であつたが、花の林を逍遙して花を待つ心持ち、または微風に面して落花の行方を思ふような境涯は、昨日も今日も一つ調子の、長閑な春の日の久しく続く國に住む人だ

けには、十分に感じ得られた。夢の蝴蝶の面白い想像が、奇抜な哲学を裏つけたごとく、嵐も雲もない昼の日影の中に坐して、何をしようかと思うような寂寞が、いつとなく、わゆる春愁の詩となった。女性にあつてはこれを春愁とも名づけていたが、必ずしも単純な人恋しさではなかつた。また近代人のアンニイのように、余裕の乏しい苦悶でもなかつた。獣などならばただ睡り去つて、飽満以上の平和を占有する時であるが、人には計算があつて生涯の短かさを忘れる暇がないために、むしろ好い日好い時刻のあまりにかたまつて、浪費せられることを惜しまねばならなかつたのである。すなわちその幸福な不調和を紛らすべく、いろいろの春の遊戯が企てられ、芸術は次第にその間から起つた。日本人は昔から怠惰なる国民ではなかつたけれども、境遇と経験とが互いに似ていたゆえに、力を勞せずして隣国の悠長閑雅の趣味を知り習うことを得たのである。

二

風土と季候とがかかほどまでに、一国の学問芸術を左右するのであるうかを訝る者は、おそらくは日本文獻のはなはだ片寄つた成長に、まだ心づいておらぬ人たちである。西南の島から進んで来て、内海を取り囲む山光水色の中に、年久しく榮え衰えていた人でないと、実はその美し

さを感じ得ないような文学を抱えて、それに今まで国全体を代表してもらつていたのは、必ずしも単なる盲従ないしは無関心ではないのであつた。今一つ根本に溯ると、あるいはこのような柔かな自然の間に、ことに安堵して住みつきやすい性質の、種族であつたからということなるのかも知らぬが、いかなる血筋の人類でも、こういう好い土地に来て悦んで永く留まらぬ者はあるまい。全く我々が珍しく幸運であつて、追われたり逃げたりするような問題が少しもなく、いつまでも自分たちばかりでのんきな世の中を樂しみ終せていたうちに、馴染みは一段と深くなつて、言わばこの風土と同化してしまひ、もはやこの次の新らしい天地から、何か別様の清く優れた生活を、見つけ出そうとする力が衰えたのである。

文学の權威はこういふ落ちついた社会において、今の人の推測以上に強大であつた。それを經典呪文のごとく繰り返し吟誦していると、いつの間にか一々の句や言葉に、型とは言いながらもきわめて豊富なる内容がついてまわることになり、従つて人の表現法の平凡な発明を無用にした。様式遵奉と摸倣との必要は、たまたま国の中心から少しでも遠ざかつて、山奥や海端に往つて住もうとする者に、ことに痛切に感じられた。それゆえに都鄙雅俗というがごとき理由もない差別標準を、みずから進

んで承認する者がますます多く、その結果として国民の趣味統一は安々と行われ、今でも新年の勅題には南北の果てから、四万五万の献詠者を出すような、特殊の文学が一代を覆うことになったのである。

江戸のあらゆる芸術がつい近いころまで、この古文辞の約束を甘受していたことは、微笑を催すべき程度のものであった。ようやく珍奇なる空想が入って来て片隅に踞まっていることを許され、または荒々しい生まれの人人が、勝手に自分を表白してもよい時代になっても、やはり露西亞とか仏蘭西とかに、何かそれ相応の先型の存在することを確かめてからでないといふ、人も歓迎せず我も突き出して行く気にならなかつたのは、おそらくはまた永年の摸倣の癖にもとづいてゐる。すなわち梅に鶯紅葉に鹿、菜の花に蝶の引続きである。しかもそれをすらなお大胆に失すと考へるまでに、いわゆる大衆文芸は敬虔至極のものであつて、今一度不必要に穩当なる前代の読み本世界に戻ろうとしてゐるのである。西歐羅巴の諸国の古典研究などは、人の考へを自由にするが目的だと聽いているが、日本ばかりはこれに反して、再び捕われに行くために、昔のことを穿鑿してゐるような姿がある。心細いことだと思ふ。だから我々だけは子供らしいと笑われてもよい。あんな傾向からはわざと離背しようとするのである。そうして歴史家たちに疎んぜられてゐる歴

史を搜して、もう少し樂々とした地方地方の文芸の、成長する余地を見つけないと思ふのである。

その話をできるだけ簡単にするために、ここにはただ雪の中の正月だけを説いて見るのだが、今説こうとしてゐる私の意見は、実ははなはだ小さな経験から出發してゐる。十年余り以前に仕事があつて、冬から春にかけてしばらくの間京都に滞在していたことがあつた。宿の屋根が瓦葺きになつていて、よく寝る者には知らずじまらう場合が多かつたが、京都の時雨の雨はなるほど宵曉ばかりに、物の三分か四分ほどの間、何度となく繰り返してさつと通り過ぎる。東国の平野ならば霞か電かと思ふよりな、大きな音を立てて降る。これならばまさしく小夜時雨だ。夢驚かすと歌に詠んでもよし、降りみ降らずみ定めなきといつても風情がある。しかるに他のそうでもない土地において、受売りして見ても始まらぬ話だが、天下の時雨の和歌は皆これであつた。連歌俳諧も謡も浄瑠璃も、さては町方の小唄の類に至るまで、滔々としてことごとく同じようなことをいつてゐる。また鴨川の堤の上に出て立つと、北山と西山とには折々水蒸気が薄く停滞して、峰の遠近に應じて美しい濃淡ができる。ははア春霞というのはこれだなと始めてわかつた。それがある季節には夜分まで残つて、いわゆるおぼろおぼろの春の夜の月となり、秋は昼中ばかり霧が立つて、柴舟

下る川の面を隠すが、夜は散じて月さやかなりと来るの
であろう。言わば日本国の歌の景は、ことごとくこの山
城の一小盆地の、風物にほかならぬのであった。御苦勞
ではないか都に來ても見ぬ連中まで、題を頂戴してそん
なことを歌に詠じたのみか、たまたまわが田舎の月時雨
が、これと相異した実況を示せば、かえって天然が契約
を守らぬように感じていたのである。風景でも人情でも
恋でも述懐でも、常にこの通りの課題があり、常にその
答案の予期せられていたことは、天台の論議や旧教のカ
テキズムも同様であった。だから世にいうところの田園
文学は、今に至るまでかさぶたのごとく村々の生活を覆
うて、自由なる精氣の行通いを遮っているのである。

三

白状をすれば自分なども、春永く冬暖かなる中国の海
近くに生まれて、このやや狭隘な日本風に安心しきって
いた一人である。本さえ読んでいれば次第次第に、国民
としての経験は得られるように考えて見たこともあった。
記憶の霧霞の中からちらちらと、見える昔は別世界であ
ったが、そこには花と緑の葉が際限もなく連なって、雪
国の村に住む人が気ぜわしなく、送り迎えた野山の色と
は、ほとんど似もつかぬものであったことを、互いに比
べて見る折を持たぬばかりに、永く知らずに過ぎていた

のであった。七千万人の知識の中には、こういう例がま
だ幾らもあると思う。故郷の春と題してしばしば描か
れる我々の胸の絵は、自分などには真先きに日のよく当
る赤土の岡、小松まじりの躑躅の色、雲雀が子を育てる
麦島の陽炎、里には石垣の蒲公英や葎、神の森の木の太
がかりな藤の紫、今日からあすへの堺目も際立たずに、
いつの間にか花の色が淡くなり、樹蔭が多くなつて行く
姿であったが、この休息ともまた退屈とも名づくべき春
の暮の心持は、ただ旅行をして見ただけでは、おそらく
北国の人たちには味わい得なかつたであろう。

北国でなくとも、京都などはもう北の限りで、わずか
数里を離れたいわゆる比叡の山蔭になると、すでに雪高
き谷間の庵である。それから嶺を越え湖を少し隔てた土
地には、冬籠りをせねばならぬ村里が多かつた。

丹波雪国積らぬさきに

つれておでやれうす雪に

という盆踊りの歌もあつた。これを聴いても山の冬の静
けさ寂しさが考えられる。日本海の水域に属する低地は、
一円に雪のために交通がむづかしくなる。伊予に住み馴
れた土居得能の一党が、越前に落ちて行くこうとして木ノ
目峠の山路で、悲惨な最期を遂げたという物語は、太平
記を読んだ者の永く忘れ得ない印象である。総体に北国
を行脚する人々は、冬のまだ深くならぬうちに、何とか

して身を容れるだけの隠れを見つけて、そこに平穩に
一季を送ろうとした。そうして春の復つて来るのを待ち
焦がれていたのである。越後あたりの大百姓の家には、
こうした臨時の家族が珍しくはなかったらしい。我々の
懐かしく思う菅江真澄なども、暖かい三河の海近い故郷
を、二十八九のころに出てしまつて、五十年近くの間秋
田から津軽、外南部から蝦夷の松前まで、次から次へ旅
の宿を移して、冬ごとに異なる主人とともに正月を迎え
た。山路野路を一人行くよりも、長いだけに此方が一層
心細い生活であつたことと思われぬ。

汽車の八方に通じている国としては、日本のように雪
の多く降る国も珍しいであらう。それが到るところ深い
谿を溯り、山の屏風を突き抜けているゆえに、かの

黄昏や又ひとり行く雪の人

の句のごとく、折々は往還に立つてじつと眺めているよ
うな場合が多かつたのである。停車場には時としては暖
国から来た家族が住んでいる。雪の底の生活に飽き飽き
した若い人などが、何という目的もなしに、鍬を揮うて
庭前の雪を掘り、土の色を見ようとしたという話もある。
鳥などは食に飢えているために、ことに簡単な方法で捕
えられた。二三日も降り続いた後の朝に、一尺か二尺四
方の黒い土の肌を出しておくと、何の餌も囓りもなくそ
れだけで、鴨や鵜が下りて来る。大隅の佐多とか土佐の

室戸とかの、茂った御崎山の林に群れて囀りかわしてい
たものが、わずかばかり飛び越えらるともうこのような国
に来てしまふのである。

我々の祖先がかつて南の海端に住みあまり、あるいは
生活の鬭争に倦んで、今一段と安泰なる居所を覓むべく、
地続きなればこそ気軽な決意をもつて、流れを伝い山坂
を越えて、次第に北と東の平野に降りて来た最初には、
同じ一つの島がかほどまでに冬の長さを異にしていよう
とは予期しなかつたに相違ない。幸いにして地味は豊か
に肥え、労少なくて所得は元の地に優り、山野の楽し
みも夏は故郷よりも多く、妻子眷属とともにいれば、再
び窮屈な以前の群に、還つて行こうという考えも起らな
かつたであらうが、秋の慌だしく暮れ春の来ることの遅
いには、定めてしばらくの間は大きな迷惑をしたこと
と思う。十和田などは自分が訪ねて見た五月末に、雪を
分けてわずかに一本の山桜が咲こうとしていた。越中の
袴腰峠、黒部山の原始林の中では、ともに六月初めの
雨の日に、まだ融けきらぬ残雪が塵を被つて、路の傍に
堆かく積んでいた。旧三月の雛の節句には、桃の花はな
くとも田の泥が顔を出していると、奥在所の村民は来て
見てこれを羨んだ。春の彼岸の墓参りなどにも、心当り
の雪を掻きのけて、わずかな窪みを作つて香花を供えて
還るといふ話が、越後南魚沼の町方でも語られている。

あの世に往つて住む者にも淋しいであろうが、この世同士の親類朋友の間でも、大抵の交通は春なればまで猶予せられ、他国に旅する者の帰つて来ぬことにきまつてゐるはもちろん、相互に燈の火を望み得るほどの近隣りでも、無事に住んでゐることが確かな限りは、訪い訪われることが自然にまれであつた。峠の双方の麓の宿場などが、雪に中斷せられて二つの囊の底となることは、常からの片田舎よりもなお一層忍びがたいものらしい。だからめいめいの家ばかりを最も暖かく、なるだけ明るくして暮そうとする努力があつた。親子兄妹が疎み合うては、三月四月の冬籠りはできぬゆえに、誰しもこの小さな天地の平和を大切に、いつかは必ず来る春を静かに待つてゐる。こういう生活が寒い国の多くの村里では、ほぼ人生の四分の一を占めていたのである。それが男女の気風と趣味習性に、大きな影響を与えぬ道理はないのであるが、雪が降れば雪見などと称して門を出でて山を望み、もしくは枯柳の風情を句にしようとする類の人々には、ちつとも分らぬまままで今までは過ぎて来たのである。

四

燕を春の神の使いとして歓迎する中部歐羅巴などの村人の心持は、似たる境遇に育つた者でないと解しにくい。

雪が融けて始めて黒い大地が処々に現れると、すぐにいろいろの新しい歌の聲が起り、黙して叢の中や枝の蔭ばかりを飛び跳ねていたものが、ことごとく皆急いで空に騰がり、または高い樹の頂上にとまつて四方を見るのだが、その中でも今まで見かけなかつた軽快な燕が、わざわざ里近く駆け廻つて、幾度か我々をして明るい青空を仰がしめるのを、人は無邪気なる論理をもつて、緑がこの鳥に導かれて戻つてくるもののごとく考へたのである。春よ還つて来たかただ一句は何度繰り返されても胸を浪打たしむる詩であつた。嵐吹雪の永い淋しい冬籠りは、ほとほと過ぎ去つた花のころを忘れしめるばかりで、もしか今度はこのままで雪の谷底に閉ざされてしまふのではないかというような、小児に近い不安を味わつていた太古から、引き続いて同じ鳥が同じ歓喜をもたらしていたゆえに、これを神とも幸福とも結びつけて、飛び姿を木に刻み壁に画き、寒い日の友と眺める習いがあったのである。そうしてこれとよく似た心持は、また日本の雪国にも普通であつた。

すなわちかくのごとくにしてようやくに迎へ得たる若春の悦びは、南の人の優れたる空想をさえも超越する。例えば奥羽の処々の田舎では、碧く輝いた大空の下に、風は軟かく水の流れば音高く、家にはじつとしていらぬぬような日が少し続くと、ありとあらゆる庭の木が一斉

に花を開き、その花盛りが一どきに押し寄せて来る。春の労作はこの快い天地の中で始まるので、袖を垂れて遊ぶような日とては一日もなく、惜しいと感歎している暇もないうちに、艶麗な野山の姿は次第次第に成長して、白くどんよりとした薄霞の中に、桑は延び麦は熟して行き、やがて閑古鳥がしきりに啼いて、水田苗代の支度を急がせる。この活き活きとした季節の運び、それと調子を合わせて行く人間の力には、実は中世のなつかしい移民史が匿れている。その歴史を滲み透って来た感じが人の心を温めて、旅にあっては永く家郷を懐かしめ、家には冬の日を夢を豊かにしたものであったが、単に農人が文字の力を備うことをしなかつたばかりに、その情懷は久しく深雪の下に埋もれて、いまだ多くの同胞の間に流転することを得なかつたのである。

五

そうしてまた日本の雪国には、二つの春があつて早くから人情を錯綜せしめた。ずっと南の冬の短かい都邑で、編み上げた暦が彼らにも送り届けられ、彼らもまた移つて来て幾代かを重ねるまで、その暦の春を忘れることができなかつたのである。全体日本のような南北に細長い山がちの島で、正朔を統一しようとするのが実は自然でなかつた。わずかに月の望の夜の算えやすい方法をも

つて、昔の思い出を保つことができたのである。しかるに新しい暦法においては、さらに寒地の実状を省みることなくして、また一月余の日数を去年から今年へ繰り入れたのである。これが西洋の人のするように、正月を冬と考えることができたならば、その不便もなかつたのか知らぬが、祖先の慣習は法制の感化をもつて自然に消滅するものと予測して、なまじいに勧誘を試みようとしなかつたために、ついにこういう雪国においても、なお正月はすなわち春と、固く信じてかわらなかつたのである。

東京などでも三月に室咲きの桃の花を求めて、雛祭りをするのをわびしいと思う者がある。去年の柏餅の葉を塩漬にしておかぬと、端午の節供というのに柏餅は食べられぬ。九月は菊がまだ見られぬ夏休みの中なので、もう多くの村では重陽を説くことを止めた。盆も七夕もその通りではあるが、わずかに月送りの折合いによつて、馴れぬ闇夜に精霊を迎えようとしているのである。しかし正月となるとさらに今一段と大切なる賓客が、雪を踏み分けて迎えられねばならなかつた。正月様とも歳徳神とも福の神とも名づけて、一年の福運を約諾したまうべき神々がそれであつた。暦の最初の月の満月の下において、ぜひとも行われねばならぬ儀式が幾つでもあつた。人も知ることくこれらの正月行事は、一つとして農に係る

ないものはなかった。冬を師走しすいの月をもつて終るものとして、年が改まれば第一の月の三十日間を種籾たねまよりも農具よりも、はるかに肝要なる精神的の準備に、捧げようとしたのであつて、すなわち寅とらの月をもつて正月と定めた根源は、昔もやはり温かい国の人の経験をもつて、寒地の住民に強いたことは同じであつた。たくさんのけなげなる日本人は、その曆法を固く守りつつ、雪の国までも入つて来た。白く包まれた広漠の野山には、一筋も春の萌もしは見えなかつたけれども、神はなお大昔の契約のままに、定まつた時をもつてお降りくだなされることを疑わず、すなわち冬籠りする門の戸を押し開いて、欣然えんぜんとしてまぼろしの春を待つたのである。

もしも新たに自分のために発明するのであつたら、おそらくこのような不自然不調和を受け入れることはしなかつたであらう。辺土の住人が世間の交わりが絶えると、心安い同士の間には身嗜みせみみの必要もなく、鬚ひげを構かまわなかつたり皮衣を着たり、何か荒々しい風貌ふうぼうを具そなへて来るのを見て、時としては昔袂せまを別つた兄弟であることを忘れようとする人たちもあるが、仮に何一つ他には証拠のない場合でも、かほどまでも民族の古い信仰に忠実で、天下すでに春なりと知る時んば、わが家の苦寒は顧みることなく、また何人の促迫をも待たずして、冬のただなかにいそいそと一年の農事の支度に取とりかかる人々が、

別の系統から入つて来た気づかいはない。

あるいは今日の眼から見れば、そんなにまで風土の自然に反抗して、本来の生活様式を墨守するにも及ばなかつたのかも知れぬが、同じ作物同じ屋作りの、いづれも南の島にのみ似つかわかつたものを、とにかくにこの北端の地に運んで来て、辛苦の末にようやく新たなる環境と調和せしめたのみか、なおできるならば西伯利亜にも勘察加にも、はた北米の野山にも移して見ようとする、それがむしろ笑止なるこの国人の癖であつた。かつて中央日本の温和の地に定着して、こんなによく調和した生活法がまたとあらうかと悦んだ満足が、あるいは無用に自重心を培養した結果でもあらうか。何にもせよ曆の春が立ち返ると、西は筑紫の海の果てから、東は南部津軽の山の蔭に及ぶまで、多くの農民の行事がほとんどいささかの變化もなしに、一時一樣に行わるるは今なお昨のごとくであつて、しかも互いに隣県に同じ例のあることも知らぬらしいのは、すなわちまたこれらの慣習の久しい昔から、書伝以外において持続していたことを意味するものでなくて何であらう。

六

ここにその正月行事の一つ一つを、列挙して見ることは自分にはむづかしいが、例えば田畠を荒そうとするい